

「分析哲学の新たな方法論の可能性」

鈴木貴之

(東京大学大学院総合文化研究科)

要旨：分析哲学のおもな方法論は概念分析だと考えられてきた。そして、哲学的に重要な概念の分析は、さまざまな個別事例にその概念があてはまるかどうかに関する直観に依拠すると考えられてきた。しかし、直観に依拠した概念分析に対しては、近年、直観の信頼性に関する理論的な批判や、実験哲学研究によって直観の多様性や不安定性を明らかにする実証的な批判が提出されている。これらの批判が妥当なものだとすれば、分析哲学にはどのような可能性が残されているだろうか。第一の可能性は、概念分析に経験的な手法を取り入れることである。第二の可能性は、哲学の研究対象は概念ではなく世界そのものだと考えることである。第三の可能性は、哲学の目的は概念の分析ではなく、概念工学、すなわち概念の改良または創造だと考えることである。しかし、いずれの見方も、哲学のすべての問題領域にあてはまるものではないように思われる。哲学は、性格の異なる複数の営みを含む多元的な学問なのかもしれない。